7 会員の紹介　会員の活躍をお知らせします

7.1 水中考古学の魅力（江差町教育委員会・小峰彩椰さん）

図 7.1　江差町教育委員会に配属された小峰彩椰さん

小峰彩椰さんは、令和 3 年（2021）3 月に東海大学を卒業し、同年 4 月に江差町教育委員会に奉職しました。専門は水中考古学です。卒業論文では、弥生時代の相模湾沿岸地域を対象とした、潟湖の地形復元と港の役割を担う遺跡の交易活動をテーマに取り上げました。

江差町では、昭和 50 年～ 56 年に日本の水中考古学の嚆矢ともいえる開陽丸の調査が行われました。国土を海に囲まれた我が国は、海中にも多くの遺跡や遺物が眠っています。しかし、近年までその重要性が強調されることが少なかったと言えます。水中遺跡の保存に関心が持たれるようになった現在、難易度の高い水中遺跡の保護に向き合います。

現在は、博物館施設の管理運営や文化財の保護管理、開陽丸に関する文献調査を中心に行っています。開陽丸の文献調査では、オランダで行われた進水式の会食メニューの復元を試みます。

観光地である江差では町内の歴史文化に関する案内をする業務も多く、自分の知識を誰もが理解しやすい言葉で伝えることの難しさを感じていると言います。中学生を案内した際には、後日、感謝の手紙が届けられ、新しいことを知ってもらうことの嬉しさを知ったと言います

今後は自身でも郷土資料館の展示を手がけたいと考えていますが、北海道の土器型式や出土陶磁器、地域の歴史文化など、専門分野問わず勉強しなければならないことが山積しており、それらの勉強に日々取り組んでいます。また、開陽丸の発掘調査で引き揚げた遺物の保存状態には課題も多く、その改善のため、保存科学や保管方法についての知識は必須と考えています。専門領域である水中考古学についても、まだまだ知識が浅いと自評します。

当面の目標は開陽丸の保護・活用です。しかし、開陽丸が現在もなお、江差港の海底に保存

図 7.2　自分でも展示を手がけてみたいが、その前にまだまだ勉強することがたくさんある、と語る小峰さん

されていることを知らない町民が意外にも多くいることに驚いており、町民に対する普及活動に力を入れていきたいと考えています。日本で初めて本格的に調査された水中遺跡である開陽丸の保護と活用は、日本の水中考古学の発展につながるため、各種事業や調査を精力的に行っていきたいと語ってくれました。

（インタビュー　石井淳平）

7.2 中世館跡を掘る（上ノ国町教育委員会・佐藤貢平さん）

佐藤貢平さんは、令和 3 年（2021）3 月に札幌学院大学を卒業し、同年 4 月に上ノ国町教育委員会に奉職しました。現在は、塚田直哉主幹（当会事務局長）とともに史跡上ノ国館跡洲崎館の調査を進めます。

札幌学院大学時代にはなるべく多くの現場経験を積むために、現場に参加できる機会を逃さないよう、積極的に発掘調査に参加していたと言います。発掘現場が減少している現在、発掘調査スキルを身につけるためには、自ら進んで動かなければならなかったようです。

卒業論文では現在の職場となる史跡上ノ国館跡をテーマに取り上げました。発掘調査が進められている洲崎館をはじめとし、勝山館、花沢

図 7.3　史跡洲崎館跡を掘る佐藤貢平さん

館を含めた上ノ国の館跡の歴史的な位置づけを検討しました。そうした学生時代の経験を活かし、現在は、史跡上ノ国館跡の整備に伴う遺構確認調査に関わっています。

今年度、史跡洲崎館跡の発掘調査では花沢館跡につづく 2 例目の懸仏が発見されました。佐藤さん自身が担当者として関わっている遺跡から出土したことは、非常に大きな喜びだったと言います。一方、「考古学の知識が足りていないことは日々感じている」と佐藤さんは語ります。二度はできない発掘調査ですから、まずは上ノ国町内で出土する遺構や遺物について、しっかりと観察し、適切な所見が導き出せるようになりたいと考えています。

「将来は上ノ国の館跡については勿論、道南の館跡についても研究し、多くの人に上ノ国をはじめとした道南の中世について知ってもらいたい」と、抱負を語ってくれました。

（インタビュー　石井淳平）